

私を突き動かすもの

ピナ・バウシュ

自分の幼い頃、思春期や学生時代、それからダンサー、振付家として歩んで来たこれまでの時間を振り返る時、私はいくつかの情景を思い浮かべます。そうした思い出は音や匂いに満ちています。そして、もちろんのこと、私の人生に関わった人々、そして今もともにいる人々で満ちています。これら過去の情景・記憶は繰り返し戻って来て、居場所を探しています。私が子どもの頃に体験したことのいくつかは、かなり後になって舞台上に再び姿を現しています。

それでは、私の幼い頃の話から始めましょう【Photo1ー3】。

忘れがたいのは戦争の体験です。ゾーリンゲンの町は爆撃で激しく破壊されました。空襲警報が鳴ると、私たちは庭の小さな防空壕へ避難しなければなりません。一度などは家の一部分に爆弾が落ちてきたこともありましたが、全員無事でした。しばらくの間、両親は私をヴッパタールの伯母のところへ預けました。そこには我が家より大きな防空壕があり、安全だと考えたからです。私は白い水玉模様のある黒い小さなリュックサックを持っていて、人形がそこから顔を覗かせていました。それには、いつもきちんと物が詰められていて、空襲警報の時には持ち出せるように置かれていました。家の裏庭のことも思い出します。そこには水を汲むポンプがありました。私たちの地域には一つしかないものでしたので、住民が水を汲むためにいつも行列をなしていました。

食べるものが何も無かったため、人々は買い出しに行かざるを得ませんでした。身の回りの物を食料と交換したのです。例えば、私の父は、掛け布団2枚、ラジオ1台、長靴1足と引き換えに、1頭の羊を手に入れました。そのおかげで、私たちはミルクを飲むことができたわけです。この羊は種づけされ、小さな子羊を産みました。両親は子羊を「ピナ」と名づけました。可愛い小さなピナでした。ある時のこと、確かイースターの頃でしたが、あの「ピナ」がローストされて食卓に載っていました。子羊は殺されたのです。私はとてもショックを受け、それ以来、子羊の肉は食べていません。

両親【Photo4】は、ゾーリングゲンでレストラン付きの小さなホテルを運営していましたので、私も、兄弟姉妹と同じように手伝わねばなりませんでした。何時間もジャガイモの皮むきをしたり、階段を掃除したり、ルームメイキングをしたり、ホテルに必要なあらゆる仕事をしました。しかし、私はまだ幼く、部屋のあちらこちらで駆けたり、跳ね回ったりしていたものです。そんな様子をお客様も見ていました。店には、近くの劇場から、合唱団員たちが定期的に食事に来ていました。彼らはいつも、「ピナは絶対に子どもバレエ教室へ入るべきだよ」と言っていました。そうしてある日、私は彼らに連れられて、劇場の子どもバレエ教室へ行ったのです。当時、私は5歳でした。

教室に通い始めてまもなく、私は決して忘れることのできない体験をしました。腹ばいになって両足を後ろに高く持ち上げ、前方に伸ばし、そして頭の左右に持って行くという動作をしなければならなかった時、他の子どもたち全員ができるわけではなかったのに、私は苦もなくこなしてしまったのです。先生は私に向かって、「まるで曲芸師ね」と言いましたが、当時、私にはそれがどういう意味なのかもちろん理解できませんでした。それでも、何か特別らしいということは先生の口調から何となく感じられたので、それ以来、私は欠かすことなく教室に通おうと決めたのです。

私たちの家の裏にはそれほど大きくない庭があり、家族用の防空壕と、ボーリングの原型である九柱戯(きゅうちゅうぎ)というゲームのレーンとなっている細長い建物が建っていました。その裏庭は以前、園芸センターとして使われていました。この広い土地は、両親がガーデン・レストランを開店するために購入したものでした。手始めにコンクリートで丸いダンスフロアを造ったのですが、その後残りの部分は手つかずのままでした。しかし、私や近所の子どもたちにとっては、そこは天国でした。すべては自然のまま伸び放題で、雑草の間に思いがけなくすてきな花が咲くのです。夏になると、私たちは九柱戯レーンのタール塗りの熱い屋根の上に座り、枝を伸ばしている酸っぱいダークチェリーの実を食べることができました。使い古しのソファの上でトランポリンのように飛び跳ねることもできました。古くて錆びついた温室での動物園ごっこが、私の生まれて初めての演出の仕事だったかもしれません。何人かが動物に、何人かが来園者に扮したのです。もちろんダンスフロアも利用しました。そこは舞台となり、私たちは有名俳優に成りきました。私は大抵、スターのマリカ・レック役を演じたものです。しかし、母はこうしたことをとても嫌がりました。母がやってくると、誰かが合図して皆で隠れました。

近所の工場ではチョコレートやキャンディーを製造していて、私たち子どもはいつも、

暖かくて甘い蒸気の立ち上る排水溝の上に立っていたものでした。そこではお金の持ち合わせがなくとも、甘い匂いは楽しめたのです。

我が家のホテルのレストランも、大いに私の関心を惹きつけました。両親は非常に忙しく、私の面倒を見る余裕がありません。ベッドに行くべき時間になっても、私はテーブルの下に隠れて起きていました。見るもの聞くものすべてがとても刺激的に感じられました。友情、恋愛、言い争いといった、町のレストランで体験できるすべてがそこにあったのです。このような体験が、私の空想力を非常にたくましくしたのだと思います。私はすでにこの頃から、観察する人間でした。おしゃべりではなく、どちらかといえば寡黙でした。

私の初舞台は、あるバレエの夕べです。5歳か6歳の頃でした。出し物はスルタンと彼の愛人たちが登場するハーレム物で、スルタンは多くのエキゾチックな果物に囲まれて寝椅子に寝そべっています。私はムーア人の化粧を施し、衣装を着て、大きな団扇をずっと煽いで風を送らねばならない役でした。ある時は、『青い仮面』というオペレッタで、新聞配達役を演じる羽目になったこともあります。「サン・レモ新聞、サン・レモ新聞、アルマンド・チェリーニが受賞したよ」と、ずっと叫んでいなければなりませんでした。私は何事においても細部にまでこだわることに大きな喜びを見出していましたので、地元の『ゾーリングン新聞』の新聞題名の上から一つひとつ紙を貼りつけ、「サン・レモ新聞」と正確にレタリングを施しました。そんなところまで見る人は誰もいませんでしたが、私にはとても重要なことだったので。その後、私は多くのオペラやオペレッタ、ダンス公演に出演することができました。ダンス公演で群舞の一員として踊ることもありました。私が常に明確に意識していたのは、何かしら劇場に携わることだけをしたい、踊る以外のことはしたくない、ということでした。

ある時、子どもバレエ教室で何かをしなければならない場面があったのですが、私にはどうすればよいのか全く分かりませんでした。私は絶望的な気持ちになり、恥ずかしく思い、そうすることを拒みました。ただ、「できない」と言ったのです。すると、先生は私を帰宅させました。教室に戻るにはどうしたらよいか分からず、私は何週間も苦しみました。数週間後、先生が家にやってきて、なぜ来ないのかと尋ねました。私はもちろん再び通い始めたのですが、「できない」という言葉はそれ以来二度と口にしていません。悩みの種と言えば、時々母からもらうプレゼントでした。母は、私のために特別な物を選ぶことに心血を注いでいました。例えば、私が12歳の時、大きな毛皮のコートをもらいました。初めてのプレゼントは、当時店に並んだばかりのチェックの長ズボンでし

た。緑色の四角い靴ももらいました。でも、私はどれも身に着けたくなかったのです。目立ちたくなかったからでした。

私の父は背が高く恰幅が良く、とてもユーモアがあり、我慢強い人でした。高々とすてきに口笛を吹くことができました。子どもの頃、そんな父の膝の上に座るのが大好きでした。父の足は並外れて大きく、靴のサイズは50(約32cm)でした。そのため、靴はいつも特注でした。私の足もどんどん大きくなり、12歳の頃にはサイズが42(約27cm)になっていたのも、それ以上大きくなって踊れなくなったらどうしようと不安に感じていました。「神様、これ以上私の足を成長させないで」と祈ったものです。

ある時、父が重い病気になり、治療のために湯治に行くことになりました。私が12歳の時です。二人の隣人が見守ってくれる中、私はレストランを一人で切り盛りしました。2週間、たった一人で店をやり、ビールを注ぎ、接客しました。その時に多くのことを学んだのです。とても重要だと思うと同時に、とても楽しく仕事をしました。私は他に代え難い経験ができたと思っています。

私は宿題をするのが好きでした。特に計算問題に大きな喜びを感じていました。課題そのものではなく、課題を書くことと、書いたページがどう見えるかを楽しんでいたのです。

イースターには、私たち子どもはイースターエッグ探しをします。母はよく、数日かけて探さなければならぬ場所に隠したものです。私はその場所を見つけ出すことが好きでした。探り当てた時でも、もう一度卵を隠してくれるように母に頼んだものでした。

母は、雪の中を裸足で歩くのが好きでした。私と一緒に雪合戦をしたり、かまくらを作ったりしました。木登りも好きな人でした。母は雷雨をととても怖がり、クローゼットの中に吊るしてあったコートの後ろによく隠れたものです。

いつも驚かされたのは、母の旅行計画です。例えば、母はロンドン警視庁へ行きたがっていました。父は、そもそも母の願いを全部かなえるのが好きな人でしたので、両親は実際にロンドンへ出かけて行きました。

父がラクダにまたがっている写真が残っていますが、両親がどの国で撮ったものかは分かりません。

母はメカに弱かったのですが、私はいつも驚かされました。ラジオが壊れた時、母が

解体・修理して、再び何とか組み立てたこともありました。

父は、レストラン付きの小さなホテルをゾーリングゲンに購入する以前には、長距離運転手をしていました。タウンスのつつましい家庭の出身で、姉妹がたくさんいました。最初は馬車での運搬でしたが、後にトラックに替えてドイツ中をくまなく走っていました。よく運転中の話をし、トラック運転手が口ずさむ長い長い歌を大声で歌ってくれました。

父は一度たりとも、私を叱りつけることはありませんでした。たった一度だけ、非常に重大な事態のとき、父は私を「ピナ」ではなく、本来の名前である「フィリピーネ」と呼んだことがありました。父は、全幅の信頼を置くことのできる人でした。

両親は、私のことをとても誇りに思っていました。私のダンスを見たことがあったわけでも、特にダンスに興味があったわけでもありません。でも、私は両親から愛されていると感じていました。何も証拠は要りません。両親は私を信頼し、決して非難しませんでした。私は罪悪感を抱く必要が全くありませんでした。大人になってからもそれは変わりません。このことが、両親が私に与えてくれた最もすばらしい贈り物です。

14歳になると、私はエッセンのフォルクヴァンク・シューレのダンス専攻課程へ進みました【Photo5、6】。この学校で、クルト・ヨースとの決定的な出会いがありました。ヨースはこの学校の創設者の一人で、偉大な振付家です【Photo7～10】。

フォルクヴァンク・シューレは、あらゆる芸術が一カ所に集まる場でした。オペラ、演劇、音楽、ダンスなどの舞台芸術だけでなく、絵画、彫刻、写真、グラフィック、デザインなどの課程もあり、どの部門にも優秀な教師が揃っていました。廊下には、教室から音や旋律や台本を朗読する声が聞こえてくるかと思えば、絵具や様々な材料の匂いが漂っていたものです。至るところ、練習に余念がない学生であふれていました。私たち学生は、他の課程をお互いに行き来しました。誰もが他分野に興味を持ち、多くの様々な共同プロジェクトが生み出されました。この学校時代は、私にとって非常に重要でした。

クルト・ヨースは、ダンス専攻課程に傑出した教師を集めていましたが、さらに自分自身が高く評価する他の教師や振付家を、主にアメリカからエッセンに長期間招きました。私は、こうした教授陣から多くを学びました【Photo11、12】。

専門教育において非常に大事だったのは基礎、それも幅広いベースを持つこと、その上で自分自身が表現すべきものを自分で見つけ出さねばなりませんでした。つまり、

「私」は何を表現すべきか、「私」は一体何を主張したいのか、さらにどんな方向へ「私」は進んでいくべきなのか、ということを見つけなければなりません。おそらくここに、その後の仕事の基礎が置かれたと言えるでしょう。

クルト・ヨースは、私にとって特別な存在でした。彼は心の温かさとユーモアを備え、あらゆる分野についての知識を信じ難いほど持っていました。例えば、私は彼を通して初めて、本当に音楽に触れることができました。それまでは、我が家のレストランのラジオから流れてくる流行歌しか知らなかったのですから。まるで二人目の父のような存在です。私にとって、彼の人間性と物の見方は最も重要でした。大事な年頃に彼と出会えたことは、なんと幸運だったのでしょうか。

学生時代に背中が痛むことが多かった時期があり、多くの医者にかからねばなりませんでした。診断結果は、すぐに踊ることを止めなければ、半年もしないうちに松葉杖の生活になるだろう、というものでした。どうすればいいのか。そこで私は、たとえあと半年間しか残されていないなくても、踊り続けようと思ったのです。私は、自分にとって本当に大切なものは何か、という決断を下さなければならなかったのです。

1958年、私はフォルクヴァンク・ライストウングス・プライズにノミネートされました。そのため自分で小さなプログラムを作る必要がありました。発表の日、いよいよ私は舞台に立ちます。ポジションを決めたところで、照明が当たりました。ところが、何も起こりません。ピアニストがいないのです。ピアニストがどこにもいないと、会場が大きくざわめきました。私は舞台上でポーズを取ったまま立ち続けました。ますます落ち着き払い、立ち続けたのです。どれくらい時間がたったのか、もはやわかりません。全く別の建物にいたピアニストが見つかるまで、かなりの時間が流れました。会場の人々は、舞台上で私が確信をもって冷静にポーズを取り続けている姿を唾然として見ていましたが、私はますます強くなりました。ようやく音楽が鳴って、私は踊り始めました。こうして当時の私は、非常に困難な状況において自分の平静さを保てること、困難からエネルギーを生み出せることに気づいたのです。それは、信頼することのできる自分の能力でした。

私は、学ぶことや踊ることに貪欲でした【Photo13】。そのため、ドイツ学術交流会が行っているアメリカ留学のための奨学金に応募しました。合格し、奨学金が下りて初めて、それがどういう意味を持つのかようやく分かり始めました。英語が全く話せない18歳が、単身船でアメリカへ行くのだということを理解したのです。両親は、ククスハーフェンの港まで私を見送りに来てくれました。別れの時、吹奏楽団が演奏し、人々は皆泣いていました。乗船した私が手を振ると、両親は手を振って泣き、私も船上で泣きま

した。もう二度と会えないような気がして、怖かったのです。

船上で私は、ニューヨークのルーカス・ホーヴィング宛に簡単な手紙を書き、ル・アーヴルから投函しました。彼は、フォルクヴァンク・シューレで講師をしていた人物です。ニューヨークで迎えに来てくれることを期待したのです。8日後ニューヨークに到着した時、私は健康診断書を手提げではなく、トランクに入れたままでした。1,300人の乗客の入国手続きが終わるまで船上で何時間も待ち、ようやくトランクを受け取りました。ルーカス・ホーヴィングは、たとえ私の手紙を受け取っていたとしても、もう待つてはいないだろうと思っていました。ところが、下船すると、なんとそこに彼が立っていたのです。しおれた花が、彼の腕に垂れ下がっていました。とても暑い中、何時間もずっと私を待ち続けてくれていたのです。

ニューヨークでの生活は当初、楽ではありませんでした。英語を話せなかったからです。何か食べたくてカフェテリアに行けば、直接欲しいものを指差すことはできました。ある日、支払おうとして、財布を持っていないことに気づきました。紛失したのです。どうしよう、どのように払えばいいのかと途方にくれる状況でした。しばらくして私はレジへ行き、財布を紛失したことを説明しようとした。バッグからトシューズや他のシューズを出してカウンターに並べ、全部ここに置いて再び戻ってくるからと言いました。するとレジの男性は、私が帰宅できるように、5ドルをポンと渡してくれました。それほど私を信用してくれたことが信じられませんでした。それからというもの、ただこの男性に挨拶するためにだけ、私は繰り返しそのカフェテリアに通いました。ニューヨークでは、よくこうした場面に遭遇しました。人々はそれほど親切でした。

ニューヨークでは、自分に与えられたものは何でも吸収しました。あらゆることを学び、体験したかったのです。当時のアメリカのダンス界は、ジョージ・バランシン、マーサ・グラハム、ホセ・リモン、マース・カニングハムといった卓越した人たちが活躍する黄金時代でした。私が学んだジュリアード音楽院の教授陣も、アントニー・チャーダー、ホセ・リモン、グラハム舞踊団のダンサーたち、アルフレッド・コルヴィーノ、マーガレット・クラスクといった顔ぶれでした。さらに、ポール・テイラー、ポール・サナサルド、ドニーヤ・フォイアーらとも数え切れないほど一緒に活動しました。

私は、ほぼ毎日のように公演を観ました。すべてが重要で比類の無いものでした。そのため、1年分と考えていた費用で、少なくとも2年間は滞在しようと決めました。つまり、儉約しなければならぬわけです。まず、歩くことにしました。そしてしばらくの間、ほとんどアイスクリームだけ(ナッツ・アイスでしたが)で栄養補給しました。それに小瓶

のバターミルク、テーブルの上に乗っているたくさんのレモン、大量の砂糖、これら全部を混ぜるととてもおいしいのです。それが絶妙な組み合わせのメイン・ディッシュでした。

私は痩せていくことを気に入っていました。さらに自分の内の声に、自分の動きに耳を澄ますようになりました。そうすると何かしらもっと純粹に、より深まる感じがしました。思い過ぎだったかも知れませんが、身体の変化だけではない何かある変化が起こっていました。

ニューヨークでの生活も2年目になり、当時メトロポリタン歌劇場の芸術監督だったアントニー・チューダーの紹介で、私は幸運なことに団員としての契約を結ぶことができました。メトロポリタンでの経験も大変重要なものでした。残念なことに、ちょうどマリア・カラスが退団した時期でしたが、まだそこに彼女の存在を感じることができました。自分で数多く踊る以外に、たくさんのオペラを観たり、楽屋のスピーカーを通して歌手の歌声を聴いたりしました。いろいろな声を聴き分けることを学び、正確に聴き分けるのはなんと楽しかったことでしょう。

その後体験した特別な出来事についてお話ししましょう。ヨーロッパ滞在からメトロポリタンへ戻る際、飛行機の予約が超過していて、搭乗することができなかったことがあります。その日はちょうど、ニューヨークで弁護士と会う約束がありました。メトロポリタン歌劇場で働くために、パスポートに何か付け加えてもらう必要があったのです。そのためどうしてもニューヨークに戻らねばなりませんでした。私は待つ代わりに、ニューヨークまで5回以上乗り換えが必要な飛行機に乗ることにしました。途方もない回り道で、トロント、シカゴ、それからどこかと、極めて厄介な旅でした。しかし、どうにかやり遂げ、やっとニューヨークへ到着しました。ただし、別の空港でした。よく覚えてはいないのですが、そこから今度はヘリコプターで目指す空港へ連れて行ってもらえるように、またしても片言の英語で何とか交渉しました。結局、希望通りにしてもらうことができました。私は成功したのです。そのフライト以降、たとえどこへ連れて行かれようと、もう不安はありませんでした。もちろん荷物は届いておらず、2週間後に受け取るはめになりました。到着時の私の所持品は、ハンドバッグ1つだけでした。

この一連の出来事は、すべて予想外の展開でした。予定表はありませんでした。そのように行動できた理由はわかりません。それほど行動する力があるということも意識していませんでした。舞台上であのように立ち続けられた理由もほとんどわかりません。考えた末の行動ではなく、単にそうなっただけなのです。想像したり、望んだりするの

ではなく、何かをすると、何かが変わるのです。

2年が経ち、クルト・ヨースから電話をもらいました。彼がフォルクヴァンクに小さなバレエ団を再建することになり、私に戻ってくるよう要請してきたのです。アメリカに残りたい気持ちと、ヨースの振り付けで踊りたいという夢の間で板ばさみになり、ひどく葛藤しました。どちらも捨てたくはありませんでした。私はニューヨーク暮らしが大好きで、すべてがうまく行っていました。それでも、結局はエッセンへ戻ったのです。

ヨースは、再び舞踊団を立ち上げました。フォルクヴァンク・バレエです。私は引き続き素晴らしい教師や振付家たちと働くことになりました。ヨースは私を信頼し、責任を与え、彼の旧作や新作の振り付けで踊るだけでなく、助手として働くことも許してくれました。しかし、力を出し切っていない、物足りない気持ちがありました。踊ることに対する強い欲求と、自分自身を表現したいという衝動があり、私は振り付けを始めたのです。ある時、ヨースがリハーサルを見に来て、「なぜ君はいつもあっちこっちと床に這いつくばっているんだい？」と聞きました。自分にとって重要なものを表現するために、他人の動きという素材や形式を利用することは、私にはできません。その人に対する尊敬の念からそう思うのです。すでに見たものや習ったものは、私にとって触れてはいけないタブーのようなものです。つまり私は、なぜ、どのように自分を表現できるのかという袋小路に自らを追い込んでいたのです。

ヨースがエッセンを離れる際、私はフォルクヴァンク・タンツステューディオの芸術監督の職務を引き継ぎました。私は仕事と責務に明け暮れました。外国公演も企画しました。ちょっとした振り付けもしました。2度ほどヴッパタールへ招待されたこともありました。

その後、ヴッパタール市立劇場総監督のアルノ・ヴェステンヘーファーが、私にヴッパタール舞踊団の芸術監督を引き受けないかと打診してきました。本当は断じて劇場で働きたくはありませんでした。不安も大きく、自分にそれができるとは思いませんでしたし、自由に仕事をするのが好きだったからです。しかし、彼は諦めず、何度も何度も繰り返し尋ねてきて、ついに私は「やってみます」と口にしていました。

就任当初のこと、私は大きな集団を前にリハーサルで、「わからないわ」とか、「ちょっと考えさせて」などと言わねばならなくなるのでは、という大きな不安を抱えていました。本当は、「OK、こうして、こうしましょう」と言いたかったのに。私はすべて綿密にプランを練っていましたが、自分の構想とは関係のない全く別の方へ関心が向くことに、やが

て気づいたのです。次第に、しなければならないことが分かってきました。つまり、プラン通りにするか、どこへ私を導くか分からない何かを思い切って試みるか、決心が必要でした。『フリッツ』という私の初めての作品では、まだプランに沿っていましたが、その後計画を立てること自体を止めてしまいました。それ以降、私は思い切った試みを続けています。それがどこへ向かうのかは分からないままです。

本当は、私は常に踊っていたいだけでした。とにかく踊らずにはいられませんでした。踊りこそが自分を表現できる言語なのです。ヴッパタールにおける初期の振付作品のうち、『春の祭典』の犠牲者役や、『タウリスのイフィゲネイア』のイフィゲネイア役などは、自分自身で踊りたいと思ったほどです。こうした役柄はすべて私の身体を用いて書かれているからです。ところが、振付家としての責務のため、踊りたいという欲求をいつも抑えてきました。本来私の中にあるこの愛情を、私の踊りたいという大きな願いを、他の人たちへ譲り伝えることに至ったのは、そういう訳なのです。

観客にしてみれば、私たちの新しい出発は極端すぎる変化でした。ヴッパタール市立劇場の私の前任者はクラシックバレエを上演し、観客から非常に愛されていました。ある特定の美学が期待されていました。それ以外に別の形式の美しさもあるのだという論議はなされなかったのです。

最初の数年間は、非常に困難な時期でした。ドアの音を激しく立ててホールを去る観客や、口笛を鳴らしたり、ブーイングをしたりする観客が必ずいました。リハーサル室でいやがらせの電話を受けたこともありました。ある作品の時には、護衛を4人も連れて観客席へ出向きました。怖かったのです。ある作品については、「音楽は非常に素晴らしい。目を閉じて聴いていればよい」という評が、新聞に掲載されました。オーケストラや合唱団も私に対して冷たかったのです。私は合唱団と一緒にぜひ何か創り上げたいと考えていましたが、どんなアイデアも拒否されてしまいました。ついに私は、合唱をボックス席から、つまり、一部の観客に歌ってもらうことに行き着きました。それはとても素晴らしい出来栄でした。

私たちがブレヒトとヴァイルの夕べを催した時、オーケストラの何人かの楽団員は、「こんなものは音楽じゃない」と言いました。私はまだ若く、経験不足でしたので、そんな私など簡単にあしらえると単純に考えたのでしょう。とても心が痛みました。しかしそのようなことで、自分が大事に思うことを表現したり、試みたりすることを止めようとは思いませんでした。決して怒らせるようなことはせず、ただ私たちについて話すように心が

けたのです。

ダンサーたちは、私とともに大いに誇りを持ってそのような困難な道を歩んでいました。それでも、時には大きな問題が生じました。あるシーンの出来がとてよく、私は喜んでいるのに、ダンサーの一部はショックを受け、叫んだり、私に不平を言ったりすることもありました。私のすることは不可能だと言うのです。

『春の祭典』を制作している時のことです。オーケストラの編成が大きすぎて、劇場のオーケストラボックスに入り切れませんでした。そこで、録音テープを使用することになり、ピエール・ブーレーズ指揮によるすばらしい録音を使いました。

『青髭ーベラ・バルトークのオペラ「青髭公の城」のテープを聴きながら』では、私のアイデアを全く実現することができませんでした。私が評価していた歌手を起用したのですが、彼は青髭役に適さなかったのです。緊急事態を前に私はロルフ・ボルツィクと一緒に全く別のアイデアを考え出しました。テープレコーダー付きの台車のようなものを作り、レコーダーの長いコードを部屋の天井に固定しました。青髭は車を押して行きたいところへ一緒に移動することができるし、音楽の巻き戻しやそれぞれのフレーズの繰り返しが可能になります。このようにテープの早送りや巻き戻しによって、青髭は自分の人生を分析することができるのです。

合唱団やオーケストラとの問題を回避するため、次の作品『私と踊って』【Photo14】では、専ら美しい古い民謡だけを使いました。女性ダンサーが一人ずつリュートのみの伴奏で独唱しました。

その次の『レナーテの移住』では、音楽はテープだけを扱い、一場面のみバックで老齢のピアニストが演奏しました。このように、音楽では別の新しい世界が開けたのです。

以来、異なる国々や文化に根ざした多様な音楽財産が、私たちの作品には欠かせない構成要素となっています。オーケストラや合唱団との共同作業はまた、作品を再演する際など、新しい可能性に対する大きな好奇心と意欲を呼び起こしています。

問いかげによって創り上げるという方法も、新しく採り入れたものでした。すでに『青髭』で、いくつかの役柄のためにダンサーに質問するというやり方を始めていました。その後、ボーフム劇場で初演したマクベスに基づく作品『彼は彼女の手を取り城に誘うー皆もあとに従う』では、この方法をさらに進化させました。4人のダンサー、4人の俳優、1人の女性歌手と1人の菓子職人が登場する作品です。この作品では、もはや決まりきった動きを用いるわけにいかず、どこか別の所から出発する必要がありました。私は、

いわゆる「質問」、つまり、私が常に自分自身に対して問いかけていることを彼らに投げかけました。この制作方法は、土壇場から生まれてきたものです。これらの「質問」は、テーマに手探りで注意深く近づくための手段です。非常にオープンな作業であると同時に、非常に正確な方法でもあります。質問は、私が自分一人では全く考えもつかなかったような多くの事柄へ案内してくれるのです。

このように最初の数年間は、私にとってとても難しい時期でした。苦しいこともありました。しかし、私は物事を簡単に投げ出すような人間ではありません。一筋縄ではいかない事態でも、私は逃げません。どんどん仕事を進めました。他にやりようがなかったのです。どのように私が考えるのかを話し続け、行うよう試みました。そうしなければなりませんでした。

そんな時に私を助けてくれる一人の男性が現れました。それがロルフ・ボルツィクです。『オルフェウスとエウリディーチェ』【Photo 15左】が、ヴッパタールで初めて彼とともに創った作品です。ロルフ・ボルツィクと私は仕事を一緒に行っただけでなく、共同生活も始めました。私たちは、フォルクヴァンク・シュレーの学生時代からの知り合いでした。彼はグラフィック専攻で、デザインに卓越した才能を持ち、写真家であり、画家でもありました。学生時代からありとあらゆる発明を行っていて、例えば、水上走行も可能な折りたたみ自転車などを開発していました。彼はあらゆる技術的な物や、飛行機や船の開発に関心がありました。非常にクリエイティブな人でしたので、まさか自分が舞台美術家になるなどとは考えもしなかったでしょう。同様に、私も自分が振付家になるなど全く思いもしませんでした。ただ踊りたかっただけなのです。私たちは二人とも、なるべくしてそうなたただけのことなのです。

共同作業は、非常に密度の濃い集中的なものでした。私たちはお互いから刺激を受け、どの作品においても何千ものアイデアを出し、おびただしい数の案を作りました。新しい作品の成立過程で、質問し、試み、迷い、そして絶望している時ですら、私たちは相手を信頼することができたのです。ロルフ・ボルツィクは、いつもすべてのリハーサルに立ち会いました。常にそこにいて、私をいつも支え、守ってくれました。彼の想像力は豊富で、途切れることがありませんでした。

『七つの大罪』では、彼は舞台技術者と劇場から街中へ出て行き、ある道路の型を取ってきました。舞台上の道路が本物らしく見えるようにするためです。彼は舞台美術家として、自然の物をステージ上に登場させた最初の人物です。例えば、『春の祭典』では舞台は土で覆われましたし、『青髭』では落ち葉、『私と踊って』では木や藪や柴

【Photo16】、『アリア』ではついに水まで使用しました。すべて70年代の作品です。大胆かつ美しいプランでした。そのうち、動物も舞台に登場するようになります。カバやワニも、彼の発案でした。いつも劇場の工房では、「そんなこと無理だ」とまず言われました。しかし、ロルフ・ボルツィクはどのようにすれば実現するかを知っていて、すべて実現させてしまったのです。彼自身は、自分の舞台を「自由な活動空間」と呼んでいました【Photo17】。彼の言葉に従えば、「我々を楽しくさせ、残酷な子供にする空間」だということです。ダンサーたちは皆、彼を尊敬し、とても愛していました。彼が撮ったリハーサルや公演時の写真は、親近感にあふれ、情愛に満ちています。誰もこのような見方はできません。

彼の最後の舞台美術作品は、『貞女伝説』です【Photo18】。私たちは彼がもはや長くは生きられないということはずいぶん前から知っていました。しかし、この『貞女伝説』という作品は悲劇的な痛ましい作品ではありません。ロルフ・ボルツィクは、愛を求める気持ちと生きる喜びとが共存する舞台となるよう望んでいました。1980年1月、ロルフ・ボルツィクは長い闘病生活の末、亡くなりました。35歳でした。

私は、故人を悼むあまり悲しみには沈んでいられないことをすぐに悟りました。こうした自覚によって、勇気を得たのです。私が仕事を続けていくことは、ロルフの意向に沿うことでもありました。今何もしなければ、二度と何かをしようと思わないのではないか。私は、新しい作品を創ることにより、悲しみや敬意を一つの形にまとめられると分かっていたいました。

そうしてできた作品が、『1980年-ピナ・バウシュの世界』です。リハーサルで私たちはいつものように、子どもの頃についてのたくさんの質疑応答をしました。私はこの時、ペーター・パプストという舞台美術家（彼は劇場や映画製作の現場で多くの演出家とともに仕事をしていました）に、一緒に仕事をしないかと尋ねました。彼から、『1980年』の舞台美術を担当してもよい、という承諾を得られたのは大きな幸運でした。

ペーター・パプストと私は、すでに27年以上も、これまでにない作品を創るという冒険に意欲的に関わり合ってきました。それだけではありません。彼は大切な舞台美術家であるばかりか、アドバイスや実践を通して、私たちや舞踊団全体のために不可欠な存在になったのです。たくさんの舞台空間が生まれました【Photo15右、19、20】。いくつかの例を挙げましょう。

幕が上がる-壁-壁が崩れる-砕ける大きな音-埃。それに対してダンサーはどう振舞えばよいか。

または観客席に入る、芝生-草の匂い-蚊。起こっているすべてが密やかである。

水-水面に映る、しぶきをあげる、音をたてる。衣装は濡れて、身体に張り付く【Photo21、22】。

または、雪が降る-降るのは花びらかもしれない……。

新作のいずれもが、それぞれ新しい世界を持っています。

ペーター・パプストやダンサーたちが、これほど長い期間、困難な道を私とともに歩んでくれたこと、私に大きな信頼を寄せ続けてくれることに対し、とても感謝しています。彼らは皆、輝く珠玉の存在です。それぞれが自分自身の方法や異なるフォームを持っています。私は、ダンサーたちを愛しています。彼らは美しい。私は、彼らの内面がどんなに美しいかをお見せしたいと思っています。

私は、ダンサーたち一人ひとりを愛しています。常々感じていることは、ダンサーというのは舞台上で初めて知ることができるということです。彼らが自分のことを少しずつさらけ出し、一つの舞台が終わるたびに一人ひとりを以前より近くに感じることができるのはとても素晴らしいことです。これは全く現実のことです。例えば、私があるダンサーと契約するとします。良いダンサーであることを期待するのはもちろんですが、それと同時に未知な部分もあります。私にはただ一つの予感があるだけです。つまり、私がとてつもなくもっと知りたいと思う何かがある、という予感です。私は彼らを支え、本人さえ気づいていない部分を見つけ出そうと努めます。非常に短時間で開花する人もいれば、何年もかかって突然開花する人もいます。長い間踊っているダンサーの中には、2度目の春を迎えたように感じる人もいるかもしれません。彼らから次々と引き出すことのできる新しい部分に、私はただ驚かされるばかりです。それは減ることがなく、とめどなく出て来るのです。

私たちの仕事で最も素晴らしいことの一つは、すでに何年も前から様々な国で作品制作をしてきたという点でしょう。ローマでの私たちの体験を元に作品を共同制作する、というアルジェンティーナ劇場からの発案は、私のその後の展開と制作方法にとって決定的、いえ運命的な意味があったと言えます。なぜならそれ以来、私たちの作品のほとんどすべてが、他文化との出会いを通じた共同制作によって生まれているからです【Photo23、24】。香港、ブラジル、ブダペスト、パレルモ、イスタンブール……さらに美しい貴国、日本との出会いからも生まれています。全く異なる風俗、音楽、慣習に接することで、未知ではあるけれど誰にとってもなじみのあるものを、ダンスという作品

の中で表現することができるのです。未知のものを知ること、それを分かち合い、怖がらずに体験すること、その出発点が、ローマで制作した『ヴィクトール』でした。現在、共同制作はタンツテアターに欠かせなくなっており、私たちのネットワークはどんどん広がっています。

ある時、北米大陸のパウワウという先住民族の集会で、バッファローの肋骨を購入したことがあります。この骨には本当に細かいシンボルが多数記されていました。その時私は、骨の一部を入手した誰もが自分の住所を一冊のノートに書くのだということを教えられました。そうすることで、このバッファローは至るところへ広がっていったのです。私たちは皆、世界中に広がったこのバッファローのように、ネットワークを築いています。私たちの共同制作に影響を与え、作品に流れ込むものすべてが、最終的にタンツテアターの一部になりますが、私たちはどこへでも出かけてそれを持ち帰ります。結婚すると相互に親戚関係となるのに、少し似ているかもしれません。

舞踊団としても、私たちは非常に国際的です。異なる文化圏出身の多様な個性が集まっています。いかに私たちはお互いに影響し合い、刺激を与え、相互に学んでいることでしょうか。外国へ旅をするばかりでなく、私たち自身がすでに一つの世界なのです。そしてこの世界は、出会いや新しい経験によって、絶えず新たな豊かさを得ています。

1980年、チリのサンティアゴでの客演中に、私は人生のパートナーとなるロナルド・カイと知り合いました。彼は詩人で、チリ大学で美学と文学を教える教授です。1981年に私たちの息子ロルフ＝サロモンが生まれて以来、ヴッパタールで一緒に暮らしています。私は、人がどのように死ぬのかを経験しなければなりませんでした。同時に、人がどのように生まれてくるのかを経験することもできました。そうした出来事によって、いかに世界の見方が変化するかということも体験しました。子どもがどのように物事を経験するか、子どもがいかに偏見にとらわれることなくすべてを観察するか、どれほど自然や人に信頼を寄せるかを見てきました。自分の身体で何がどのように起こっているのか、身体がどのように変わるのかという体験とは別に、一人の人間の誕生を丸ごと把握しました。自分が何もせぬまま、すべてが起こるのです。こうした体験が、どれほど私の作品と仕事に流れ込んでいるか計り知れません。

私が子どもの頃から知っている町、ヴッパタールで30年以上も生活し仕事をしているのは、殊のほかすばらしい偶然です。私はこの町が好きです。着飾ったおしゃれな

町ではなく、普段着の町だからです。私たちの稽古場「リヒトブルク」は、50年代に営業していた、かつて映画館だった建物です。「リヒトブルク」へ向かう時、バス停の前を通り過ぎるのですが、毎日のように悲しそうな疲れた表情の人々を多く見かけます。こうした感情もまた、もちろん私たちの作品に生かされています。

私は以前、「私の関心は、人がどう動くのかではなく、何が人を動かすのかということにある」と発言したことがあります。この言葉はよく引き合いに出されますが、今でも生きています。

長年にわたって、私たちの公演は世界中から招かれてきました。異文化圏への旅行と客演は私たちを豊かにしてくれます。多くの出会いから、素晴らしい交友関係が育ちました。たくさんの経験は忘れがたいものです。イスタンブールで『フェンスタープッツァー』を上演した時のことです。ダンサーたちが昔の写真を見せるシーンがあります。子どもの頃の写真や、両親の写真です。そして、こう言います。「これは私の母です」、「これは2歳の私です」。それから、ダンサーたちはお互いに自分のプライベート写真を見せ合い、それを観客にも見せるために客席へ下りて行きます。すると突然、観客も自分の写真を取り出したのです。美しい音楽に合わせて皆で写真を見せ合っている様子は、言葉に表わせないほどの光景でした。多くの人が泣きました。

このような数多くの体験を通して、私たちはたくさんの贈り物を受け取っています。その都度それを作品にして少しでもお返ししようと努力していますが、いつも十分ではないような気がしています。何をお返しできるのだろうか、どのようにしたら返せるのか、時折そんなことは不可能であるような気持ちにもなります。たくさんの贈り物を前にして、私が返せるものはあまりに少なすぎるのではないかと思うのです。

新作初演前の不安は、今でもあります。これ以外の形があるのではないかと迷い、プランも台本もなく、音楽も舞台装置もない。初演の日が決まっていて、それまでの残り時間はわずかという時、一つの作品を創るのは決して娯楽ではない。もう二度と作品など創りたくない、私は考えてしまいます。これは毎回味わう試練です。それなのに、なぜ私は同じことを繰り返しているのでしょうか。長年仕事をしてきても、まだ学んでいないのです。辛いことですが、どの作品も再び最初から始めなくてはなりません。自分が到達したいところに決して手が届いていないと、いつも感じています。ところが、初日も終わらないうちから、私はすでに次の作品プランを考えているのです。どこからこの

エネルギーは生まれるのでしょうか。そう、もちろん日々の修練は大切です。とにかく働き続ければ、突然何かしら、何かとても小さなものが生まれます。それがどこへ行くのかはわかりませんが、誰かが灯した明かりのようなものです。そして、再び働き続ける勇気を持ち、元気を取り戻します。あるいは誰かが何か美しいものを創ると、人は引き続き働こうという意欲と力を得ます。内側から湧き上がってくるのです。

振り返れば、これまで私は、ダンサーやスタッフ一同と長い道のりをともに歩いてきました。私は人生において、特に旅や友人との交流を通して、たくさんの幸運に恵まれました。ですから、多くの人たちに、他の文化や生き方と触れ合ってほしいと願っています。お互いを恐れなくなり、私たちすべてを相互に結びつけているものがよりはっきり見えるのではないのでしょうか。どのような世界に住んでいるのかを知ることが大切だと、私は考えます。

舞台のすばらしいところは、私たちが普段の生活では全くできない、してはならないことを、舞台上で表現できるということでしょう。時には、私たちが未知のものに立ち向かうことによってのみ、明らかにされることもあります。さらに、私たちの問いかけが、今日の私たちの文化圏に関する経験だけでなく、はるか昔の異文化体験をも私たちにもたらすことがあります。つまり、舞台上で表現するということは、確かに持っているものの、日常的に認識していなかったり、気に留めていなかったりする知識を取り戻すようなものなのです。すべての人が等しく持っている何かを思い起こさせ、そこから私たちは大きな力を得ているのです。

写真キャプション

- Photo1 生家(ホテル)、レストラン、裏庭で(本人提供、3枚組)
- Photo2 小学校で、1948年(本人提供)
- Photo3 実家で、1949年(本人提供)
- Photo4 両親、1930年代(本人提供)
- Photo5 フォルクヴァンク・シューレでのレッスン、1966年 撮影:Walter Vogel©
- Photo6 フォルクヴァンク・シューレでのレッスン、1967年 撮影:Walter Vogel©
- Photo7 クルト・ヨース作『緑のテーブル』リハーサル風景  
ヨース、バウシュ、ファブリー 撮影:van Leeuwen
- Photo8 クルト・ヨース作『緑のテーブル』リハーサル風景  
ヨース、バウシュ、ファブリー 撮影:van Leeuwen
- Photo9 クルト・ヨース作『緑のテーブル』リハーサル風景  
ピナ・バウシュとジャン・セブロン 撮影:不詳
- Photo10 クルト・ヨース作『緑のテーブル』リハーサル中のピナ・バウシュ  
撮影:Anthony Crickmay ©Anna Markard
- Photo11 アントニー・チューダー作『リダの園』に出演中のピナ・バウシュ  
撮影:不詳
- Photo12 ルーカス・ホーヴィング作『出会いの歌』に出演中のピナ・バウシュ  
撮影:不詳
- Photo13 フォルクヴァンク・シューレにて 撮影:不詳
- Photo14 『私と踊って』 アルナルド・アルヴァレス、エスコ・エドモンゾン  
撮影:Ulli Weiss©
- Photo15 左:『オルフェウスとエウリディーチェ』  
ドミニク・メルシー、マルー・エロド 撮影:Ulli Weiss©  
右:『バンドネオン』 メリル・タンカード、ウルス・カウフマン  
撮影:Ulli Weiss©
- Photo16 『私と踊って』 アンサンブル 撮影:Ulli Weiss©
- Photo17 『カフェ・ミュラー』 ピナ・バウシュ 撮影:Jan Minarik©
- Photo18 『貞女伝説』 ダナ・サピロ 撮影:Ulli Weiss©
- Photo19 『バンドネオン』 アンサンブル 撮影:Ulli Weiss©
- Photo20 『フェンスタープッツァー』 ベアトリーチェ・リボナーティ

撮影: Ursula Kaufmann©

Photo21 『フルムーン』 瀬山亜津咲 撮影: Oliver Look©

Photo22 『フルムーン』 瀬山亜津咲、ホルヘ・プエルタ・アルメンタ

撮影: Ursula Kaufmann©

Photo23 『ネフェス(呼気)』 ファビアン・プリオヴィーユ 撮影: Ulli Weiss©

Photo24 『ネフェス(呼気)』 ダフニス・コッキノス他アンサンブル

撮影: Ursula Kaufmann©



photo 1



photo 2



photo 3



photo 4

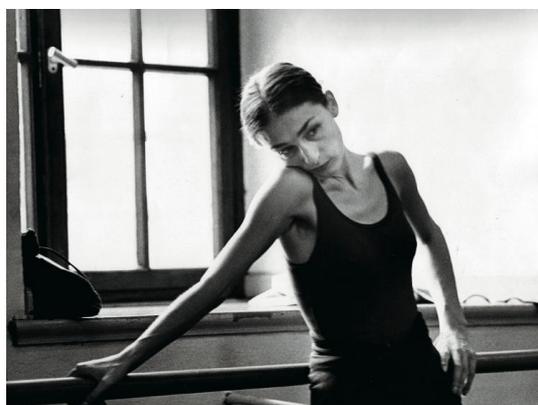


photo 5

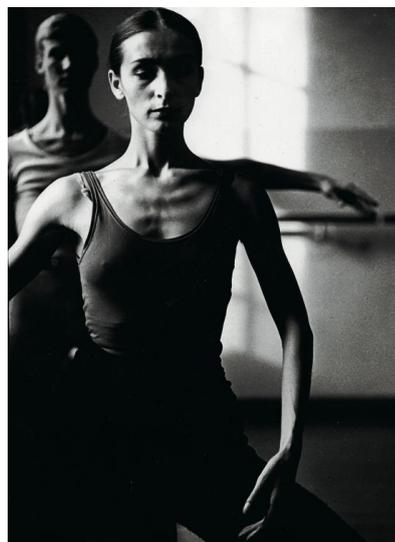


photo 6

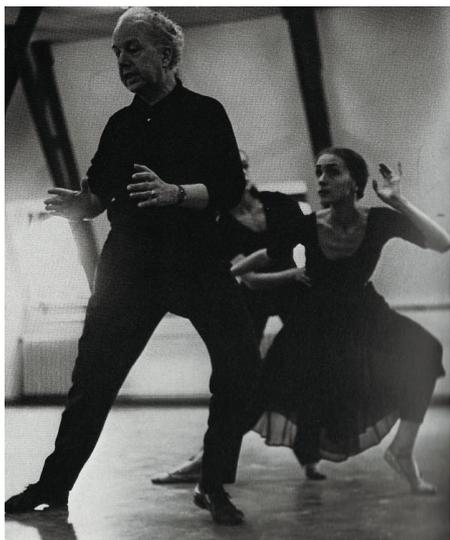


photo 7



photo 8



photo 9



photo 10



photo 11



photo 12



photo 13



photo 14



photo 16



photo 15



photo 17



photo 18



photo 19



photo 20



photo 21



photo 22

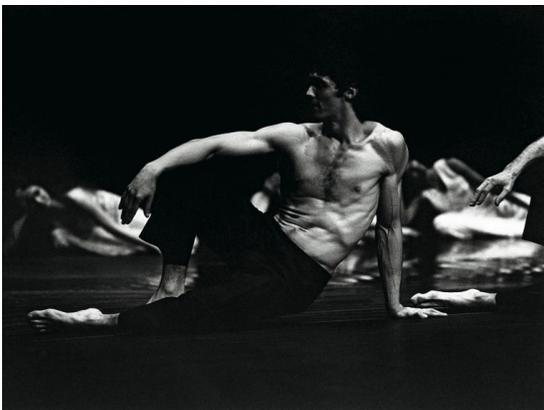


photo 23



photo 24